PROJECT

日中の人類学の交流と今後の展開

文 韓　敏

機関研究 ●「包摂と自律の人間学」領域
中国における家族・民族・国家のディスコース（2012-2014）

2013 年度は、国立民族学博物館（以降、民博）の機関研究「中国における家族・民族・国家のディスコース」の 2 年目に当たる。本研究の一環として、2013 年 11 月 18 日～ 19 日、中国北京の中国社会科学院民族学・人類学研究所（以下社会科学院）において、国際シンポジウム「中日の人類学・民族学の理論的刷新とフィールドワークの展開」を社会科学院との共催で実施した。

この北京国際シンポジウムには、民博から、塚田誠之・横山廣子・佐々木史郎・韓敏・河合洋尚の 5 名、日本の大学から、末成道男（東洋大学）・渡邊欣雄（國學院大学）・佐々木衛（神戸大学）・周星（愛知大学）・秦兆雄（神戸市外国語大学）・田村和彦（福岡大学）・川口幸大（東北大学）・清水享（日本大学）・李海燕（東京理科大学）の 9 名が出席し、全員発表を行った。中国側は、社会科学院をはじめ、中央民族大学、清華大学、北京大学、中国人民大学、中山大学、雲南財経大学、四川大学、貴州民族大学、蘭州大学、南開大学などの研究者が参加し、33 本の研究発表を行った。1 日目は 52 名、2 日目は 57 名、両日合計 109 名が参加した。

開会式において、色音（社会科学院）と韓敏が、それぞれ中国と日本側のプロジェクトリーダーとして大会の趣旨と参加者を紹介したあと、王延中（社会科学院民族学・人類学研究所長）と塚田誠之（民博研究戦略センター長）が、両機関の交流の歴史を回顧し、日中の人類学の交流に対する今回の国際学会の開催意義を述べた。

両機関は、2012 年 8 月に学術協定を締結し、研究プロジェクトの展開と研究者の交流を推進していくことを約束した。この学術協定にもとづいて、民博側は、同年 11 月に社会科学院の研究者に加えて韓国の研究者を招き、国際シンポジウム「中国の社会と民族──人類学的枠組みと事例研究」を開催した。今回のシンポジウムは、以上の成果を踏まえたうえで企画されたものである。

本シンポジウムにおいて、日中の人類学者たちは、家族・民族・国家に焦点を当てた最新の研究成果を発表し、理論的構築を試みながら、フィールド調査の方法、倫理、民族誌の書き方などについて議論した。また世界各地の人類学の動向を視野に入れて、「複数形の人類学」の構築に向けての議論も展開した。その成果を、おもに以下の 3 つにまとめて紹介する。

中国社会科学院民族学・人類学研究所に集まる日中の人類学者（2013 年 11 月 17 日、北京市）。

日中人類学者の共通認識──フィールドワークの普遍的な重要性

フィールドワークは、1922 年にラドクリフ＝ブラウンの『アンダマン島民』とマリノフスキーの『西太平洋の遠洋航海者』の出版以降、人類学では常識的な手法として認知されるようになった。しかしながら、フィールドワークが実際どのように行われ、どのような性質をもっているかについての検討は、ほとんどが調査に当たる本人にまかされ、期間の長短、訪問の繰り返しの有無、参与の度合いなどといった特性が、調査の内容やその後の分析にどのような影響をもたらすかといった点などについての議論は不十分だった。末成道男は、1961 年から東アジア各地（日本、台湾の原住民と漢族、韓国、中国華南地域、ベトナム）で、人類学の現地調査を行ってきた。その経験にもとづき、調査対象としての東アジア各社会の特徴および調査方法などを分類した。また、サーベイ（survey。調査者と被調査者が問答以外に深い関わりをもたない調査）とフィールドワークの相違を指摘し、今後はフィールドワークをもっと重視し、研究すべきだと主張した。

末成の問題提起は、日中人類学者の間で共感を引き起こしている。中国とラオスでの調査経験をもつ南開大学の袁同凱は、調査資料の正確さ（accuracy）と真正性（veracity）を確保しつつ、異文化を研究するには、長期の参与観察が、もっとも有効な手段であると発言した。人類学の研究実践におけるフィールドワークの重要性は、日中の人類学者にとって共通の関心であることが確認された。

日本における中国の人類学研究の特徴

韓敏は、民博の展示と共同研究を事例に、欧米の人類学者による中国研究と比較しながら、日本の中国に関する人類学的研究の理論的系譜、問題意識と特徴について発表した。

日本における中国の人類学的研究は、日本人の起源、日本文化のルーツ探しの一環としてスタートした。そのため、日本人は、最初から日本と何らかの関係のある他者、あるいは

無関係の他者として、中国を東アジア、さらにユーラシア大陸の枠組みに入れて研究してきた。梅棹忠夫の文明の生態史観や、生態学、植物学と文化地理学にもとづいた照葉樹林文化論（佐々木高明と中尾佐助）は、その例である。こうした理論的構想は、食物の栽培、食品加工、民具、製作技術、伝説、信仰などの分野で検討され、民博の共同研究や常設展示（日本、中国、東南アジアのそれぞれの展示場）に反映されている。

日本の人類学者の顕著な特徴は、長期かつ継続的なフィールドワークにもとづく実証的研究を重視すると同時に、中国をたんに学問の対象とせず、常にその歴史と社会に強い関心と深い理解をもつ点である。日本人にとって、中国は他人ごととして距離を置いて眺めることのできない、宿命的な「隣国」なのである（西澤 2006：161）。また、個人研究のほかに、大学、研究対象と地域の枠を越えた異なる年齢層の研究者が定期的に集まり、切磋琢磨して研究成果を共有し、積み重ねていくという特徴もある。1981 年に結成され、現在も続いている中国関係の研究者サークルの「仙人の会」や、1982 年から現在までの 32 年の間、民博で実施されてきた 15 本の中国に関する共同研究は、その良い例である。

これらの日本の人類学研究の特徴とその研究成果の蓄積は、発信と交流により、今後、もっと多くの人に理解され、評価されるだろう。

「複数形の人類学（World Anthropologies）」の構築への参与

一方、中国における人類学的研究は、20 世紀初期に自社会の研究からスタートし、その状況は最近まで続いた。20 世紀初期の中国の人類学界は、費孝通の「初訪美国」（1945）、「美国人的性格」（1947）のような、参与観察にもとづいたエッセイはあったものの、外国に対する本格的な人類学的調査には至らなかった。しかし近年、外国の民族誌的研究が徐々に展開されつつある。その推進役の 1 人である高丙中（北京大学）は、若手による外国調査の推進に力を入れており、すでにタイ、マレーシア、インド、オーストリア、アメリカ、フランス、ロシア、ドイツ、モンゴルなどへのフィールドワークを指導してきている。彼は中国もこれからは世界を研究し、WCAA（World Council of Anthropological Associations）を設立したブラジル、日本、インドなどの人類学者から学び、「複数形の人類学」の構築に積極的に参与すべきだと論じた。

結び──温故知新の集い

2 日間のシンポジウムは、両国の人類学者が、過去の歩みを回顧しながら、現在の関心事、問題意識と課題などを確認し合う、温故知新の集いとなった。

両国は、政治体制や近代化の過程は異なるが、同じ東アジア文化圏の人類学者として、多くの共通点が見つかった。現地の人びととの関係性やフィールドワークの重視は、共通点として確認できた。

また、人類学と歴史学の結合は、両国の常識の手法として確立されている点も明らかになった。「中国文明のグローバル化の試論」（渡邊欣雄）、「屯堡（トンパオ）文化のディスコースとその資源化の現状」（塚田誠之）、「中国特色の人類学的研究──歴史資料を利用する雲南ペー族の研究」（横山廣子）、「モンゴル族とチベット族の間の経済的・文化的交流に関する歴史人類学的分析」（色音）、「宋代以降福建の民間信仰の国家化」（張小軍）、「中央研究院所蔵の彝（イ）文文献とその来歴のフィールド調査について」（清水享）、「朝鮮族の国内外の移動と民族アイデンティティ（1945 年～現在）」（李海燕）の発表は、いずれも人類学と歴史学の結合の有効性を示した最新の研究成果である。これらは、いずれも今後のさらなる国際共同研究の基礎となろう。

国立民族学博物館と中国社会科学院民族学・人類学研究所が北京で学術交流協定を結んだ（左から色音、王延中、張昌東、須藤健一、韓敏）（2013 年 8 月、劉正愛撮影）。

また、ほかにも、現代社会の多様な課題に取り組むためのさまざまな理論的模索や民族誌的報告が行われた。「現代中国社会構造の変容をとらえる視点──『基礎パラダイム』構築に向けた試論」（佐々木衛）、「『傘型社会』──中国社会を観察する新たな概念」（張継焦）、「中国の災害人類学の展開」（陳剛）、「文化遺産時代の自文化研究──日常生活の記録と『異化』の日中比較」（田村和彦）、「周辺のエスニックグループに対する漢文化の生と熟の分類」（周星）、「蔵彝走廊の『溝域』という文化現象に対するエスニック理論的挑戦とその啓示」（石碩）、「博物館における赫哲族の歴史・文化表象」（佐々木史郎）、「寺廟再生記──山西省村落社会における知識の生産と伝統の再創造」（劉正愛）、「宗族のディスコースとその実践」（川口幸大）、「ベトナム客家の神仏信仰と宗教景観の創造」（河合洋尚）などは、日中の人類学者による理論的挑戦と民族誌的研究の最前線を示したものである。

20 世紀以来、日本と中国は、欧米の人類学界との接触の中で成長し、それぞれに欧米との強いパイプをもっているが、日中の人類学者の連携がまだ課題として残っている。その意味で、今回のシンポジウムは、両国の人類学の温故知新の場を提供し、今後の研究連携とネットワークの強化のために、一定の基礎を築いたと言える。

【参考文献】

西澤治彦 2006「日本の中国人類学をめぐる思索」『武蔵大学総合研究所紀要』15: 153-166。
費孝通 1985「初訪美国」（1945）『美国与美国人』北京：三聯書店。
── 1985「美国人的性格」（1947）『美国与美国人』北京：三聯書店。
『中国社会科学報』社科院専刊 第 225 期 2013 年 12 月 6 日 2 版。

かん びん

国立民族学博物館民族社会研究部教授。専門は文化人類学・中国研究。著書に『回応革命与改革：皖北李村的社会変遷与延続』（江蘇人民出版社 2007 年）、*Social Change and Continuity in a Village in Northern Anhui, China: A Response to Revolution and Reform* (Senri Ethnological Studies 58, 2001)、編著に『政治人類学：亜洲田野与書写』（阮雲星共編著 浙江大学出版社 2011 年）、*Tourism and Glocalization : Perspectives on East Asian Societies* (Senri Ethnological Studies 76, 2010)、『革命の実践と表象：現代中国への人類学的アプローチ』（風響社 2009 年）。